書式７

助成番号	016－A18

成 果 報 告 書

記入日　2018 年　10 月　31 日

氏　名 山本敬祐	渡航先国名 トルコ共和国	所属機関 イスタンブル都市大学

研究テーマ :『使節の書』から見るオスマン帝国の「近代化」

研究期間　:　　2017 年　8 月 ～　　2018 年　8 月

研究成果（概要）

18 世紀初頭の遣仏使節の報告書として内容の異なる複数の写本が伝わっていることがわかった。また、1720 年の遣仏使節の報告書と 1748 年の遣墺使節の報告書の内容を比較すると、派遣先国との関係性や政治状況の差異によって報告書における記述に変化が生じていることが判明した。

研究成果（詳細）

非欧米諸国が欧米諸国の軍事力強化に伴う国際秩序の変化に対応するために欧米の文化や制度を受容することを「近代化」と捉えたとき、欧米の文物の観察と報告は「近代化」の嚆矢と言っていいだろう。1720 年にフランスへ派遣されたイルミセキズ・チェレビが帰国後オスマン帝国君主へ提出した報告書は、初めてフランスの文物をオスマン帝国へ紹介するという性質を帯びているためオスマン帝国の「近代化」の端緒を明らかにするうえで有用と目される。そのため本研究では主としてイルミセキズ・チェレビの報告書である『フランス使節記』に着目し、他時代に、あるいは他地域へ派遣された使節たちによる報告書との比較を通して 18 世紀初頭の遣欧使節がオスマン帝国における「近代化」、殊に外交システムや文化の変化の歴史上どのような意味を持つのかを探ることを目指した。

この研究を進めるにあたってまず必要となるのは『フランス使節記』と、その比較対象となる報告書の収集である。そのためにはどのような報告書が存在し、それらが現在どこにどのようなかたちで保管され、どのように入手すればよいのかを理解せねばならなかった。それらを理解するためには当然のことながら一定水準以上のトルコ語能力、特に文章読解力と会話能力が不可欠となる。そのうち文章読解力については渡航以前から向上に努めていたため大きな問題ではなかったが、会話能力については日本で得ることが困難であったため現地で獲得した。渡航直後からトメルと呼ばれる語学学校に通い、適切な指導を受けて十分なトルコ語会話能力を身に着けた。また、現代トルコ語とは異なる、オスマン語と呼ばれる古いトルコ語の文章を読むための能力を養うためにイスタンブル都市大学で開かれるオスマン語の講義にも出席した。語学学校、大学の講義ではその修了時に試験が課されたが、ともに十分な成績を収めることができた。慎重を期すためにかなり初歩的な段階から語学力向上に注力したので、予定よりも長い期間を研究の進展のための準備の部分に費やしてしまったとの見方もできる。しかし、語学力という研究の基礎の部分を現地でしかできない方法でしっかりと固められたことは確かであり、間違いなく今後の研究活動に大きな利益をもたらす。

Unatによる先行研究によれば、1720年の遣仏使節であるイルミセキズ・チェレビの報告書『フランス使節記』には5つの刊本と11の写本が存在することになっていた。そのうち、刊本としてイスタンブルで発刊されたものは3つで、残りの2つはパリで発刊されている。また、それらはすべて19世紀後半から19世紀末にかけて世に出ている。写本のうちイスタンブルに残っているものは4つで、残りの7つはドイツやオーストリア、フランスに保管されているとされている。しかし、Göçekによる先行研究では7つの刊本と10の写本が存在するとされ、一方でKorkutによる研究では5つの刊本と9つの写本があるとされている。このように先行研究によって史料の現存状況に差異があったため、史料収集は簡単には進まなかった。そのため、まずフランスやドイツなどトルコ国内にはない史料についてはひとまず収集を先送りにし、トルコ国内に保管されているものに絞って収集した。その理由は、各先行研究で意見が異なっているのは主にヨーロッパ諸国に所蔵されているとされる史料の部分であったからである。先行研究で挙げられている写本のうち、キョプリュリュ図書館、ミッレト図書館、ズフトゥ図書館所蔵のものはそれぞれの先行研究でも異なる部分はなく、現在ではすべて一括してスレイマニエ図書館で管理されており、複写もスレイマニエ図書館で取得できることがわかったのでそこで史料収集を開始した。スレイマニエ図書館の利用には特別な申請書類等の提出も不要であり、史料の検索も閲覧室のパソコンで可能であるので収集自体に大きな障害はなかった。さらに、19世紀に発刊された刊本のうちイスタンブルで発刊されたもの2つ、パリで発刊されたもの1つの計3つの刊本についてもスレイマニエ図書館で収集できた。イスタンブル大学希少書図書館に所蔵されているとされる写本についても各先行研究で異なる記述はなかったものの、事前にウェブ上のカタログで検索したところその写本は存在しなかった。そのため、İSAM（イスラーム研究センター）にて別のカタログで検索した。その結果、先行研究で記述されている所蔵番号とは異なる番号で保管されていることが判明した。それらを踏まえてイスタンブル大学希少書図書館に赴き、写本の検索と複写の申請をした。イスタンブル大学希少書図書館での検索の結果はイスラーム研究センターにあるカタログの通りであったが、どの先行研究もイスラーム研究センターのカタログも言及していない『フランス使節記』の写本が検索結果として現れた。図書館の係員に尋ねたが「所蔵番号は異なるが同一のものである」という回答を得ただけであり、実際に同一のものが異なる番号で複数登録されているだけのようであった。さらに『フランス使節記』の写本としてトプカプ宮殿博物館付属図書館に所蔵されているものの収集に進んだ。この写本の所蔵については先行研究で意見がわかれている。UnatとGöçekはトプカプ宮殿博物館付属図書館には1つの写本しかないとしている一方で、Korkutは2つの写本があるとしている。ウェブ上のカタログで検索すると、どうやらKorkutはイランに派遣された使節の報告書を『フランス使節記』と混同しているようであった。さらに、イスタンブル大学希少書図書館での経験から、イスラーム研究センターにあるカタログで確認したところ、『フランス使節記』の写本は確かに1つだけ所蔵されていることになっていた。ところが、Unatらの記述とは異なる番号で登録されていた。やむなく情報が混乱したままトプカプ宮殿博物館付属図書館に向かい、史料の検索と複写の申請をお願いした。しかしながら、トプカプ宮殿博物館付属図書館での研究活動のためには特別な許可申請が必要であり、留学中に研究許可が下りなかったためトプカプ宮殿博物館付属図書館での史料収集は断念せざるをえなかった。結果として、19世紀に発刊された3つの刊本とイスタンブルにある写本のうちトプカプ宮殿博物館付属図書館所蔵以外のものの収集に成功した。

『フランス使節記』の比較対象として、1748年にウィーンに派遣されたムスタファ・ハッティによる

報告書である『ウィーン使節記』を選んだ。報告書自体は数多くあり、将来的にはすべてを参照して考察を深める必要があるが、まずは『ウィーン使節記』を選択した。イルミセキズ・チェレビが派遣された 1720 年はチューリップ時代と呼ばれる安定期であり、派遣先のフランスはオスマン帝国の友好国であったが、チューリップ時代終焉後 18 年が経過した 1748 年にムスタファ・ハッティが派遣されたオーストリアは、オスマン帝国と必ずしも友好関係になかった。このように時代背景、派遣先国とオスマン帝国の関係が異なるこの 2 つの報告書は比較するに値すると考えた。ムスタファ・ハッティの『ウィーン使節記』についても先行研究により写本の所在は明らかにされている。ところが、『ウィーン使節記』も『フランス使節記』と同様に各先行研究によって異なる史料の状況が記されている。Unat によればイスタンブルに 3 つ、ベルリンに 1 つの計 4 つ、Savaṣ によればイスタンブルに 3 つ、ベルリンに 1 つ、バーゼルに 1 つの計 5 つ、Korkut によればイスタンブルに 4 つ、ベルリンに 1 つの計 5 つの写本があるとされている。それらのうちトプカプ宮殿博物館付属図書館所蔵のものは記述が一致しているものの、イスラーム研究センターのカタログとは所蔵番号が異なる。上記の理由によりこの写本についての調査はかなわなかった。スレイマニエ図書館所蔵のものについては先行研究間で齟齬もなく、図書館職員のミスにより全く異なる写本の複写が渡されたことを除いて問題なく収集できた。イスタンブル大学希少書図書館所蔵のものについては Unat と Savaṣ が 1 つしかないとするのに対して Korkut は 2 つの写本の存在を主張している。この写本についてもウェブ上のカタログとイスラーム研究センターのカタログによって検索した結果、Unat と Savaṣ が述べている写本とは別の番号で登録されている写本があり、さらに Korkut は Unat らが述べている写本と別の番号で登録されている写本を異なる 2 つの写本と認識しているため 2 つの写本があると主張しているということがわかった。実際にイスタンブル大学希少書図書館で確認すると、Unat らが述べているものも、それとは異なる番号の写本もあるものの、両者は同一のものであるようであった。なぜ同一の写本が 2 つの番号で登録されているのかについては図書館職員に尋ねても要領を得ない説明しか受けられなかった。結果としてはトプカプ宮殿博物館付属図書館所蔵のものを除くイスタンブルに存在する写本は収集できた。

『フランス使節記』の写本はそれぞれ明らかにページ数、分量が異なる。すなわち、それぞれの内容がすべて同一のものとは言い難い。これについて、Uçman はイルミセキズ・チェレビがフランス側の対応に不満を持った等の描写を当時の駐イスタンブル仏大使が削除するよう時の大宰相に求め、大宰相もこれに応じたため記事数の異なる複数の『フランス使節記』が伝わっているとしている。『フランス使節記』が庭園や科学技術、病院などといったフランスの文物を詳細に伝えている一方で、『ウィーン使節記』中での描写では『フランス使節記』と比べてオーストリアの文物に強い関心を抱いているようには捉えられない。また、『ウィーン使節記』においてはオーストリア側との間で起こった諍いも削除されることなく克明に報告しており、各写本にそれほど大きな違いはないと考えられる。

以上のように、『フランス使節記』には内容の大きく異なる複数の写本が存在していること、『フランス使節記』と『ウィーン使節記』では派遣先国に対する態度が異なることが明らかとなった。今後はさらにイランやインド等のヨーロッパ以外の地域に派遣された使節による報告書やさらに後の時代に作成された報告書をも検討の範囲に加えて『フランス使節記』がオスマン帝国の「近代化」、対西欧関係史においてどのような影響を与えたかについて研究を進めてゆきたい。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学のひとつのあるべき姿として、留学先の社会に溶け込み、その一員のように暮らす中で自分がいた社会とは異なる社会を理解するというものがあるだろう。私は煙草屋の弟子になった。なったというよりは、された。家の近くの煙草屋に通っているうちに店主からお茶をもらうようになり、カウンターの内側に入れられるようになり、やがて接客をして店番を任された。

店主は親方となった。右の写真はその煙草屋の店員側からの視界である。店には様々な人たちが去来した。学校教師、不動産業者、年金生活の老人、売れない俳優、主婦、自称ジャーナリスト、ホームレス、大学生、高校生、料理人、音楽家などといった人たちからいろいろな話を聞き、またこちらも話した。単純に語学の鍛錬にも最適であったし、現代トルコ社会に生きる人たちの生々しい言葉に笑ったりぞっとしたりした。店主は自分の車でしばしば私を遊びに連れて行った。ウスキュダルまでドライブし、深夜の海水浴をし、ボスポラス海峡見物を諦めてビールを飲んだ。その途上で親方は数十年前のイスタンブルで起きたことを語った。左の写真は市場で、火曜にはここで果物を買って店に持って行った。親方は代金をくれて、私がお茶をいれて飲食しながら客が来たらお喋りをした。道端で知らない人から「お前を知っている。煙草屋にいるだろう」と言われたとき、私はトルコ社会に馴染めた気がした。

今後の社会貢献

歴史学が社会に貢献するための側面として、過去の再構築を通して現在の状況を理解し、未来への方策の一助とするというものがある。本研究を進めることで明らかになるであろうオスマン帝国の「近代化」の過程は、とりもなおさず現代のトルコが形成された過程であり、その理解は現代トルコの理解につながるだろう。現代の理解ができたとき、未来への方策を立てることはより容易になる。また、日本とトルコの「近代化」は前者が短期間のうちに急激に行われたのに対して後者は長期間断続的に行われたという違いはあるものの、ともに「成功」している。そのため、この両者の「近代化」の過程の比較はそれぞれの成り立ちの比較となり、日土相互理解のために非常に有効なものである。今後も研究を続けることで日土相互理解、ひいては国際相互理解に貢献してゆきたい。

さらには、トルコ社会で暮らす中で身に着けた自らが属するものとは異なる社会への理解力を活かしてトルコをはじめとするイスラーム世界に受け入れられる日本をつくり、あるいはイスラーム世界における日本のより深い理解を促進させる人材となってゆきたい。